



Title	歴史都市の計画規範としての風水論に関する研究
Author(s)	黄, 永融
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40216
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	黄 永 融
博士の専攻分野の名称	博士(工学)
学位記番号	第 13167 号
学位授与年月日	平成9年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 工学研究科環境工学専攻
学位論文名	歴史都市の計画規範としての風水論に関する研究
論文審査委員	(主査) 教授 鳴海 邦碩 教授 東 孝光 教授 笹田 剛史 教授 山口 克人

論文内容の要旨

本論文は、東アジアにおける宮都などの主要な歴史都市がいかなる計画理念に基づいて計画されたかについて明らかにすることを目的に、中国において発生、展開し、日本をはじめアジアの各地に伝播しその地域の都市形成に大きな影響を与えたと考えられている風水論に着目し、その概念形成および成熟過程に関する考察を踏まえ、中国、日本、台湾の歴史都市を主な研究対象として実証的に考察したもので、序章および本文5章からなる。

序章では、現存する歴史都市の立地およびその形態の分析にあたって、計画時の社会における環境理念に関する理解が不可欠であることを論じるなど、本研究の背景・意義および目的、論文の構成と研究範囲について述べている。

第1章では、東アジアの歴史都市の計画において重要な役割を果たした規範の一つが風水論に基づいたものであるという認識に立ち、中国の時代別の主要な伝統的地理学文献に基づき、風水論の基本概念と風水技法による空間構成の原則について、体系的整理を行なっている。

第2章では、中国の上古都市を事例としその儀式化した選地行為が果たした役割に関する分析を通じて風水論的な都市の計画規範の成立について論じ、さらに以降の中国古代都城を事例として文献および地図研究によってそこに反映された計画原則の内容を分析し、合せて風水論的な都市計画規範の形成と展開過程について論じている。

第3章では、日本の主要な古代宮都を対象とし、宮都の計画理念、実現された空間構成および風水論の導入過程などについて文献および実地調査により分析することを通じて、風水論の都市形態への反映および風水論の日本的な理解について考察している。

第4章では、中国からの台湾への移民によってもたらされた居住地形成の理念および台湾を支配していた清の朝廷の都市計画規範を分析する目的で、台北旧市街および台湾各地の城郭都市を事例に取り上げ、実地調査および文献研究によって、それぞれの市街地ないし城郭都市の計画内容を考察している。

第5章では、一連の考察によって得られた知見をとりまとめるとともに、東アジアおよび東南アジアにおける歴史的都市の比較研究の展開に関する新たな課題と可能性について論じ、さらに今日的な都市計画および環境計画手法に対する風水論からの示唆について述べている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、歴史都市の立地および形態はその計画時の社会における環境理念と重要な関連性をもつとの認識に基づき、東アジアにおける歴史都市が共有する計画規範を解明することを目指し、中国、日本、台湾の歴史都市を研究対象として取り上げ、計画された都市と周辺地形との関係に関する考え方およびその実態を文献研究・実地調査を通して分析した知見をまとめたものである。得られた結果を要約すると以下の通りである。

- (1) 中国古代都城の計画理念に関する分析を通じて、防災および防御の観点から診断された自然地形に関する諸知識が地形パターンに関する定型化した知識体系として整理され、さらにその過程で主要な星座の構成を地形や都城の構成パターンに擬えるなどの過程を経て、風水的計画手法が確立・展開してきたことを文献研究によって明らかにしている。
- (2) 日本の古代宮都の選地および形態計画において、中国大陸よりもたらされた風水論が基本的な計画規範として作用したことを文献研究および実地調査から明らかにし、特に平安京については、南北東西の四方に象徴的な山を望み、南北の山を結ぶ軸線を都の主軸とし碁盤目状の街路構成をとったことは、中国の歴史都市に比しても最も完成された風水手法に基づく構成であることを明らかにしている。
- (3) 藤原京、平城京および平安京の風水論に基づく空間構成として、今日一般に言われている北に山、南に池、東に川、西に大道という空間構成の認識は、鎌倉時代に生まれた変質した風水論的説明によることを文献分析により明らかにしている。
- (4) 清代末期に清朝の風水官僚によって計画された台湾各地の城郭都市の計画規範を文献研究によって類型化し、さらに同一の官僚によって計画され建設された台北城と恒春城はいずれも周囲の自然の山から選択された象徴的な山を基準とした構成をとり、それらの山を基準とした城門配置あるいは城壁や道路の軸線設定がみられることを文献および実地調査によって明らかにしている。
- (5) 台北城建設に先立って存在していた台北旧市街地は、主に福建地方からの漢族移民によって自然に形成されたが、住民の信仰の中心であった廟が風水論の考え方に基づいて立地しており、市街の形成のプロセスおよびその結果もたらされた市街地形態に重要な影響を与えたことを実地調査により明らかにしている。
- (6) 歴史都市の環境保全において建設時の計画規範によって実現した周辺地形との関係を保全することの意義と必要性を述べるとともに、自然地形の診断や周辺環境との関係を如何に取り結ぶかにその基礎をおく風水的計画手法の観点から今日的な計画手法を再評価することによって、自然との密接な連携を獲得する新たな環境計画手法が展開しうることを示唆している。

以上のように、本論文は、中国と日本および台湾の歴史都市に共通してみられる計画規範の存在を実証するとともにその特質を考察することを通じて、環境計画において周辺自然環境への配慮の必要性が強く認識されつつある今日的状況下において、新たな環境計画手法の方向性を示唆しており、環境工学の発展に寄与する所大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。